



副院長 兼 産婦人科部長
(婦人科常勤医師)

赤木 武文

あかぎ たけふみ

金丸 赤木先生の言うとおりで、やはり産科廃止から12年のブランクは大きい。その間に医療も大変進歩し

安心安全が確保できる 人材育成が必要

赤木 私は23年間、県北で仕事をさせていただき、今回庄原へ赴任しました。庄原に来て感じたのは、多くの人が三次で出産をしているということです。私が庄原に来たことにより、期待を感じますが、一旦中止となった病院での出産を再開するには、安心と安全が絶対に必要だと思っております。助産師、看護師、小児科の医師、麻酔科の医師など、病棟のスタッフがお互いに協力しないと出産は難しいと思います。どれくらいでできるのかということは難しいのです

が、少しずつ出産ができる体制をつくっていくことが大切だと思っています。例えば、庄原赤十字病院に赴任後、三次市内の産婦人科で妊婦健診を受けた方から、切迫早産かもしれない症状を訴える電話がありました。その方も婦人科医師が常勤になったという事で電話されましたが、現段階では、対応は難しいと思います。その方には妊婦健診を受けた産婦人科に相談してもらいように対応しました。そういうことが徐々に解消されていくと、最後に出産に結びつくと思っております。産科医療を再開するときは、安心して安全に産めるような環境でスタートした方がいいと思っております。そのためには、当然機器も必要ですが、やはり人材が大切ではないかと思っております。

産科医療再開への思い
市長 ご承知のように平成17年に庄原市内から産科が無くなりました。失って、一層産科の重みを感じています。今、人口減少の問題、特に若者たちが中山間地域から姿を消すという大きな問題が突きつけられています。この問題には、子どもの誕生を喜べる、安心して子どもを産めるという環境が欠かせないという思いがあり、市長になってから、ずっと産科の再開に思いをはせてきました。

産科医療再開への取り組み
市長 安心感を備えるためには、まずはスタッフをそろえること。応援体制や研修については、今も話を進めていますので、しっかり準備ができると思っています。あとは、産科の体制を整えるため、さらに常勤医師に来てもらえるよう運動していかないとけないと思っております。産科再開は市民の悲願ですので、なるべく早め

産科医療再開への取り組み
市長 一度廃止となった産科を再開するのは大変な課題ですが、皆さんの力を借りながら、どうしても庄原にもう一度産科を復活させたいと思っております。その思いは変わり



小児科部長
(市小児科診療所予定医師)

金丸 博

かなまる ひろし

小児科医師として 産科医療を支える

小児科部長 未熟性をもって生まれた赤ちゃんの命が助かるようになつてきています。昔出産できていたのだから今もできるだろう」というものではないと思います。小児科医師が何人いても、実際に赤ちゃんを診て、最初に異常に気付くのはスタッフです。そのようなスタッフを育てていくことが非常に大きな課題だと思っております。産科と小児科で足並みをそろえながら、確実に一歩ずつ進んでいければいいと思

小児科医師として
産科医療を支える
で、搬送などで手が離せなくなった際には、その間自分の診療所で、他の外来患者を受け入れ、診療することができると思っています。

産科医療再開への取り組み
市長 やはり最終的には医師の問題が一番大きいので、広島大学、市立三次中央病院、広島県と話を詰めていかなければいけません。私たちも大学や広島県に対してできるだけだけの働きかけをしているところですが、市からも広島県などに同じような働きかけをしてもらいたいと思っております。

産科医療再開に向けて— 市長×庄原赤十字病院医師

対談



庄原市は、小児科診療所、病児病後児保育施設の整備計画や庄原赤十字病院婦人科の常勤医師確保など、出産でき、安心して子育てができるまちを目指し、一歩ずつ歩みを進めています。7月20日、産婦人科再開に向けての情報共有とさらなる連携強化をするため、木山耕三市長と庄原赤十字病院中島浩一郎院長、7月から赴任した赤木武文副院長と金丸博医師の4人で対談を行いました。

産科医療再開への思い
市長 ご承知のように平成17年に庄原市内から産科が無くなりました。失って、一層産科の重みを感じています。今、人口減少の問題、特に若者たちが中山間地域から姿を消すという大きな問題が突きつけられています。この問題には、子どもの誕生を喜べる、安心して子どもを産めるという環境が欠かせないという思いがあり、市長になってから、ずっと産科の再開に思いをはせてきました。

産科医療再開への取り組み
市長 安心感を備えるためには、まずはスタッフをそろえること。応援体制や研修については、今も話を進めていますので、しっかり準備ができると思っています。あとは、産科の体制を整えるため、さらに常勤医師に来てもらえるよう運動していかないとけないと思っております。産科再開は市民の悲願ですので、なるべく早め

産科医療再開に向けて
院内の体制を整備
産婦人科、小児科の医師はどのまち、どこの病院でも引張りださず。そういう中で、庄原に来てもらえたことは、関係者の皆



庄原市長

木山 耕三

きやま こうぞう

産科医療再開への思い
市長 ご承知のように平成17年に庄原市内から産科が無くなりました。失って、一層産科の重みを感じています。今、人口減少の問題、特に若者たちが中山間地域から姿を消すという大きな問題が突きつけられています。この問題には、子どもの誕生を喜べる、安心して子どもを産めるという環境が欠かせないという思いがあり、市長になってから、ずっと産科の再開に思いをはせてきました。

産科医療再開への取り組み
市長 安心感を備えるためには、まずはスタッフをそろえること。応援体制や研修については、今も話を進めていますので、しっかり準備ができると思っています。あとは、産科の体制を整えるため、さらに常勤医師に来てもらえるよう運動していかないとけないと思っております。産科再開は市民の悲願ですので、なるべく早め

産科医療再開への取り組み
市長 一度廃止となった産科を再開するのは大変な課題ですが、皆さんの力を借りながら、どうしても庄原にもう一度産科を復活させたいと思っております。その思いは変わり

※1 詳しくは広報しょうばら2017年7月号をご覧ください。
※2 詳しくは広報しょうばら2017年3月号をご覧ください。



ないので、我々もできることはします。そしてできるだけ早く実現したいと思っています。

中島 私たちもできるかぎりの取り組みをします。

以前、産婦人科がなくなつたとき、次に小児科がなくなつたのではというわきが出たことがあります。そのとき、はっきり分かったことは、まず小児科がないと全てが始まらないということ。産科がなくなつて、出産ができなくなり、その上に小児科がなくなれば子育てができない。庄原の母親たちは、「子育てがちゃんとできるまち」「小児科医を大事にするまち」を維持しようと、「庄原の小児科医療を考えるひだまりの会」として勉強会を開くなど、本当に大きな活躍してくださっています。小児科

医が不在となれば、子育て世代は庄原に住みにくくなると思います。

「子育てができるまち」、これは金丸先生が庄原に来られたこと、市に小児科診療所、病児病後児保育施設の整備計画があることで、庄原市の規模からいうと完成に近いのではと思います。さらに、最後の「出産」まではいいと思います。赤木先生が庄原に来られ、院内の体制を整えて、まずは「妊婦が安心して暮らせるまち」を目指しています。実際には、まだ病院の体制においては不十分どころもありますが、その目標に向けて歩き始めていると思います。

その上にあるのが「お産ができるまち」だと思います。今まで、「小児科診療所・病児病後児保育施設の整備計画」や「婦人科への常勤医師の確保」という2つのステップはできていて、それだけでも相当なことです。それができていくのは中山間地域ではほとんどないと思います。

赤木 次の人材が育たないと、一旦は産科医療が始まっても、また無くなるという可能性もあります。今後はもっと中堅

とやっていけなくなるのではないかなと思っています。

金丸 小児科診療所を来年開設させてもらうにあたり、隣に病児病後児保育施設もできることになっています。以前は「病気の時ぐらいいは親が近くに居てあげるほうが、子どもにとつていいのではないかな」と思っていました。しかしながら、何年か小児科医師をしているうちに、いろいろな育児の方法があるのだなと思うようになりました。勤めてい

る親が、社会生活を営む上で、子どもが熱を出すたびに仕事を休むと、「会社に迷惑をかけている」という気持ちになり、それがストレスになり、それが子育ての楽しみを減らしているのではないかと思います。その一助となるものとして病児病後児保育があるのだと思っています。当然親も「近くについてあげたい」という気持ちを持っていて、病児病後児保育施設では、保育士が病気の子どもたちでもできる遊びなどを選びながら

庄原市の産科医療を 取り巻く主な経過

平成17年4月	庄原赤十字病院が産科を終了
平成20年4月	庄原赤十字病院の婦人科外来維持支援事業補助金開始
平成21年6月	「庄原市の地域医療を考える会」設立
平成22年4月	庄原市医療従事者育成奨励金制度スタート (平成28年度までで医学生7人、看護学生など110人を決定)
平成25年7月	広島大学病院産婦人科診療科長と市長との対談
平成25年11月	「備北圏域と庄原市の産科医療を考える集い」の開催 「庄原いちばん基本計画」へ産科医療再開支援策を計上
平成26年5月	庄原赤十字病院西棟、中央棟を改築し供用開始
平成28年度	産科医療再開準備経費補助金1700万円を活用し、婦人科の常勤化に向けた医療機器を整備
平成29年1月	「庄原市こども未来広場」関連予算が議決
平成29年7月	庄原赤十字病院婦人科の常勤医師確保

など若い医師に庄原へ来てもらい、実際に外来や病棟、手術室を見て「これなら庄原に来て頑張ってみようか」というものをつくっておかないといけないと思います。再開したのが何年かして、再び無くなるほうが、市民の衝撃は大きい。早く再開できればいいと思うのですが、十分に続けていけるような体制を整えながら取り組んでいく方がいいと思います。育てるといいうのは少し大げさですが、若い医師に興味を持って仕事をしてもらえらるような環境をつくっていくのが今の自分の仕事だと思っています。

金丸 小児科医師をしていて一番の楽しみは、子どもの成長を見ていけることです。産



保育をしていて、子どもたちは結構楽しそうにしています。私自身、昔は、子どもにとつて寂しそうな、悲しそうなイメージを持っていましたが、決してそうではないのだなと感じています。

今後どうしても人口が減り、子どもも当然減ってくると思いますが、若い世代が、庄原は昔に比べて子育て環境がとても充実したので、もう1人子どもを産み育てようと思うような環境ができれば嬉しく思います。

市長 今、みんなが頑張つて、もう一度庄原で子どもを産み、安心して育てられるような環境をつくっています。私はスピード感を持ってやっていきたいと考えていますが、安全を確保しながらするべきなのは同感です。やはり子どもがいないと、産業も前に向いて進む力がなくなりますし、いろいろな意味で子どもは力は大変重要だと思っています。産科の再開を果たし、庄原市を安心して出産でき、安心して子育てができるまちにするため、これからも力を貸していただきたいと思います。

科が再開され、生後から成長を見ていけるのは非常に嬉しいと思いますが、子どもが安心して生まれてこられるまちというのを目指すのであれば、庄原赤十字病院の小児科にNICU出身の先生方を配置するという広島大学の配慮もありますが、それ以外にも、赤ちゃんを診ることができるスタッフを育成したり、必要な設備などを充実させたりする必要があらうと思っています。

子育て環境の将来展望

市長 市は、若い世代が安心して「産もう」「育てよう」として「ここで頑張ろう」と思ってもらえるように取り組んでいかなければならないと思っています。ここまで歩みを進めていけるように取り組んでいかなければならないと思っています。ここまですべて進められたことは喜んでいますが、なるべく早く、出産や子育てを支援する環境ができていくことが大切だと思っています。そして、夢を託せる子どもたちが一人でも二人でも多く生まれ、この地域に住んでくれることを望んでいます。

中島 今後の医師確保で、特にふるさと枠(※3)の卒業医師については、庄原市

にいかに来てもらうか、若い医学生たちに庄原に興味を持ってもらうかが非常に大事だと思います。

医師を確保する手段として、ひとつは医局の方との交渉があります。これはなかなか行政の方では難しい部分であると思いますが、ふるさと枠の医師の確保に関しては、行政にいろいろ協力していただくことが多いかもしれません。「庄原市はふるさと枠の学生をとて大事にしてくれる」といったことが、卒業後のいろいろな気持ちにつながります。そういう若い人たちの目が県北の方に向けてくれるように、ぜひ市と一緒に取り組んでいきたいと思っています。

赤木 広報しようばら7月号にもありましたが、市内の小学生の人数もかなり減ってきています。

こういったことになると、歯止めをかけるという意味で、分娩できる場所などの確保もあると思いますが、その他にも、子育ての問題や教育の問題など、全般的に考える時期にきているのではないかなと思います。そのような中でいろいろな取り組みをしていかな



※3 将来広島県の医療を担う人材を広島県と広島大学が提携して育てていくことを目的とした広島大学医学部医学科推薦入学制度